

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 47

November, 2016

関西大学ニュースレター

発行日：2016年(平成28年)11月30日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

この伝統を、超える未来を。

130

KANSAI
UNIVERSITY

■対談 池内啓三理事長 / 芝井敬司学長
創立130周年を迎えて
「この伝統を、超える未来を。」
「知のたいまつ」を誇りとともに次世代へ引き継ぐ

■リーダーズ・ナウ — 5

在学生 — 法学研究科 博士課程前期課程 法学・政治学専攻 1年次生
アミシ・デービッド・カフウェ さん

卒業生 — 料理人 藤田 政昭 さん

■研究最前線

東アジアの文化交渉を研究

複合的な視野からアジアの文化を捉える — 7

文学部 — 吾妻 重二 教授

超小型視野検査システムの研究・開発

緑内障診療におけるHMD型視野計を開発 — 9

システム理工学部 — 小谷 賢太郎 教授

■創立130周年記念特集 — 11

関西大学創立130周年記念式典・祝賀会を開催

伝統への自信 未来への考動 — 「学縁」を世界に広げよう — ほか

■社会貢献・連携事業 — 17

なにわ大阪研究センターと関西国際空港のコラボ展示イベントを開催

大阪の魅力を空港から世界の人々へ ほか

■関大ニュース — 19

体育会野球部が関西学生野球連盟秋季リーグ戦で

4季ぶり35回目の優勝 ほか

■対談



池内啓三



創立130周年を迎えて ——この伝統を、超える未来を。

「知のたいまつ」を誇りとともに次世代へ引き継ぐ

池内 啓三・理事長 × 芝井 敬司・学長

今年10月1日に開催された理事会において、池内啓三理事長が再選された。また、関西大学第42代学長には、芝井敬司学長が就任した。11月に創立130周年を迎えた関西大学をさらなる発展へと導くツートップとして、大きな期待が集まる。大学を取り巻く環境が厳しさを増す中、関西大学が多様性の時代を生き抜き、先導するための勇気ある改革遂行を誓い、抱負やビジョンを語り合った。

あります。社会人教育の伝統を引き継ぎつつ、起業家育成の支援や異業種交流による価値創造の場として、関西の活性化にもつなげたいです。

芝井 池内理事長は、総務局長時代に職員の人事制度改革に注力されました。特に点検や検証の重要性を実感されているのでは？
池内 2期目を迎え、130周年記念式典も盛会のうちに終了した今、感じているのは、記念事業として取り組んだ事業や「2010プロジェクト」もまだスタート地点に過ぎないということです。今後は教育面で成果をあげる一方、財政面の検証を行わなければなりません。これらは未来に向けての投資です。施設を造って終わりではなくどう生かすか、また、事業や制度改革がどのような成果に結びついたか、この2期目は振り返り点検、検証を行う時期になります。それらを踏まえて本学の長所を伸ばし、短所を修正する方策を立て、4年間しっかり取り組みます。

◆学生パワーを引き出し、考動力へつなげる

◆改革の再起動に向けて

芝井 このたび、関西大学第42代学長に就任いたしました芝井です。関西大学は、13学部13研究科3専門職大学院と留学生別科を擁する総合大学として大きな発展を遂げ、この11月には130周年の節目を迎えました。長い歴史と伝統を持つ関西大学学長職の重責に身が引き締まる思いです。池内理事長とともに、志と勇気をもって動き、関西大学の改革、発展のために尽くすつもりです。
池内 池内理事長は2期目に臨まれますが、ご心境はいかがですか。
池内 関西大学文学部を卒業した1965年から事務職員として40年間、常務理事、専務理事、理事長として12年間、半世紀以上関西大学に奉職してきました。長く学生と直に接する職場にあり、今でも常に心にあるのは、しっかり「考動力」を身につけた学生を社会に送り出さねばという使命感です。大学のほか、高等学校、中学校、小学校、幼稚園を併設している本法人の経営においても将来を見据えた改革と検証を繰り返し、教職員3500人、学生・生徒・児童3万5000人、校友44万8000人とともに「チーム関大」として力を発揮していけるよう努めます。

池内 学長就任にあたっての抱負をお聞かせください。
芝井 激しい少子高齢化の進行とともに、18歳人口は、2018年まで118万人程度で推移しますが、2031年には100万人を切り、その後さらに減少すると予想されています。現在でも、私立大学の4割程度が入学定員割れを起こしている状況ですから、将来多数の大学が経営難に陥り、撤退を迫られるでしょう。少子化は大学にとって深刻な問題ですが、目を背けるわけにはいきません。本当に厳しい時代だからこそ、世の中の動きに対応しながら、打開策を講じなければなりません。また、その方策を外に見える形で示すことも大事です。

1期目の任期では、長期ビジョン「KU Vision 2008-2017」に基づく各種事業への取り組みや「2010プロジェクト」の検証などを行うとともに、創立130周年記念事業を推進してきました。主な事業として、イノベーション創生センターやなにわ大阪研究センター、梅田キャンパスの開設など、ハード面の充実を図りました。また、ソフト面でも「グローバルフロンティアプログラム(KUGF)」の開発、「学縁」給付奨学金制度の構築などに取り組みしました。

最近、卒業生や周囲の人から、関西大学はどのような将来像を描いているのか分りにくいと指摘されることがあります。全学で協働してそのイメージを変えていきたいと強く感じています。教育、研究、社会連携、国際活動のすべてについて、一度原点に戻って活発に動ける体制にしたい。さらなる改革が求められている今こそ、全学の衆知を集め、改革の具体案を構想し、実現するための努力と苦勞をしたしたいと思います。私の目指している本学のあるべき姿へのキーワードは、「改革の再起動」です。改革に臨む勇気を持ち、前進していきます。

中でも梅田キャンパスは、本学の知的資源を社会に還元する新たな拠点であり、社会人の学び直しの場です。かつて第2部(夜間部)が天六キャンパスにあった時代に、勉学への強い意志を持った社会人学生達の熱いまなざしを見てきた私には、特別な思いが

池内 改革の具体像についてはどうお考えですか？
芝井 戦略的な研究推進体制を整備し、大学全体の研究水準の向上を図ります。現行の研究所の充実に加えて、新しい研究組織の立ち上げも視野に入れ、知が豊かに創造される環境を創出したい。



芝井敬司

■対談

学生の自主的な学びを支援することで、「考動力」と「革新力」をもって世界を切り拓こうとする人材を育み、幅広い知の継承としての教育を広げたい。

芝井 敬司 (しばい けいじ)
1956年大阪府生まれ。78年京都大学文学部史学科(西洋史)卒業。81年京都大学大学院文学研究科博士課程後期課程中途退学。84年関西大学に着任し、専任講師、助教授を経て、94年文学部教授。文学部長、副学長を歴任し、2016年10月学長に就任。独立行政法人日本学術振興会大学教育再生加速プログラム委員会専門委員。主な共著書に「新しい史学概論」「EUと日本学」「あかねさす」国際交流―など。



長期で考えることと、今すぐ決めるべきことを区別し、数値目標とあるべき姿を明確にしながら、迅速に動ける組織づくりに注力します。

池内 啓三 (いけうち けいぞう)
1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員、96年総務局長、2000年理事、法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年学校法人関西大学専務理事。12年理事長に就任。

また、研究によって創出された知は教育活動を通じて次代に継承されます。学生の自主的な学びを支援することで、「考動力」と「革新力」をもって世界を切り拓こうとする人材を育み、幅広い知の継承としての教育を広げたいと思います。

池内 教育職員と事務職員との協力が不可欠ですね。社会に存在感を示すにはどのような大学であるべきですか？

芝井 公共との対話の道が常に開かれていることによって、大学の研究と教育が真に活力にあふれ、かつ社会との協働にも配慮した学術の健全さを担保できると考えます。大学と社会との間で多彩な交流を開花させ、豊かな社会連携を目指します。また、大学構成員の多様性を確保し、異文化理解教育を推進しながら、国際活動に果敢に取り組みます。

「研究と教育」で内的充実を図り、「社会連携と国際活動」を通じて、外側の世界と関西大学とのつながりを築くことが、本学に与えられた使命と役割を果たし、将来を拓く重要な鍵となるでしょう。

◆厳しい時代を乗り越えるために道を拓く

池内 関西大学には、明確な長期計画がない時代がありました。約20年前、自己点検・評価委員会が立ち上げられ、芝井学長は副委員長、私は事務局の担当として点検・評価活動に奔走しました。その後、長期ビジョン「KU Vision 2008-2017」及び長期行動計画を策定し、毎年度ローリング方式により見直しを行うとともに、5年目で中間見直しを行い、運営してきました。そのビジョンの最終年が目前に迫り、本学が創立130周年を迎えた今、「Kandai Vision 150」として20年後の本学のあるべき姿を描いた新たな長期ビジョンを公表しました。

芝井 私は、業界にとつての厳しさと、個別組織の苦しさは同じではないと考えます。高等教育をある種の市場として考えると、将来市場を取り巻く状況が好転する可能性は低いです。しかしすべての大学が縮小し、衰退していくかといえば必ずしもそうでは

ない。アイデアを生かし考動することで、むしろ、プレゼンスを高めることができていると思います。

アメリカでも一時期、多くの大学が生き残れないと言われていましたが、実際はほとんど減少しませんでした。社会に出た人が大学に戻るリカレントやシニア学生、留学生の受け入れに成功したからです。20歳前後の年齢層以外で市場を作り上げたことと、アメリカの大学力を世界に訴え、世界から留学生を呼び込めたことで生き残りました。同じような戦略で日本の大学が成功するかは別としても、トライする価値はあると私は思っています。1校で無理なら10校でスクラムを組んで世界へアピールする方法もあるでしょう。客観的には厳しい状況ですが、発展のチャンスでもあります。試行錯誤を許容し、まず始めてみて手応えがあれば、すかさず進む。思ったような結果が得られないからといって、時間をかけて必要以上に細かく理屈を考えている時代ではなく、迅速さが求められます。時機を逸することなく、道を拓くつもりでなければ、新しい政策はできません。

池内 私達が20年先のビジョンを作るのは、教育機関だからです。一人の児童が大学を卒業するまで教育を受け、社会人となって社会的評価を得るのは30年以上も先です。長期で考えることと、今すぐ決めるべきことを区別し、数値目標とあるべき姿を明確にしながら、迅速に動ける組織づくりに注力します。

国公立大学は中期目標達成によって、運営費交付金の配分が増減することもあり、変革を迫られています。また、規模の小さい私学は小回りが利き、改革に着手しやすい構造です。大規模私立大学である本学が後れを取ることのないよう、芝井学長とともに先頭に立ち、現状維持は退歩だという気持ちで改革を具現化していきます。

芝井 今やネットで大学間の比較ができ、教育職員や大学の教育システムにも、常に創発性、創造性が強く求められています。大学は青年期後半に過ごす場所で、自我形成が進みます。そこでで

れだけ知識を得て、精神的にも成長してくれるか、私達は見守りながら育てていく義務があります。大学の教職員もまた、変化に挑み、新しい時代を拓いていく人にならねばなりません。

◆地域、社会、世界に開かれた大学へ

池内 本学の外国語学部では、8カ国1地域にある提携大学に1年間留学するStudy Abroadプログラムを実施し、非常に高い評価を受けています。グローバル化への対応と国際活動という意味では意義が大きいですね。

芝井 日本の大学は20歳前後の学生が多いですが、世界的に見れば、飛び級制度を利用した12歳の大学生がいたり、一旦社会に出た人がスキルアップのために大学生になるのも、ごく普通のことです。

池内 大学を卒業したら、学生と大学のつながりは終わるのではありません。大学は学び直しができるセカンドチャンスでもあります。ただ、40歳の新人社員を受け入れる企業はどれほどあるでしょうか。理想と現実のミスマッチが問題です。社会に開かれた大学の意義を高めるには、社会や企業文化の醸成が望まれます。

芝井 本学では2005年に地域連携センターが発足し、八幡市の男山団地の再編や養父市の農業再生など、地方自治体との連携実績も数多くあります。キャンパスの外も学びの場です。また逆に、キャンパスをコミュニティの一部と考えてもらえるような関係を地域や企業などと作りたいたいです。それは学問研究が健全であるための、非常に大事な部分です。現実の課題にぶつかって、どんな知識を総動員すればこの問題が解けるか、あるいはどのようなコミュニケーションが必要かを経験し、キャンパスに戻ってくる。その点は留学と似ているかもしれません。

◆学生を全力でサポートし、同じ方向を見つめ、動く

池内 本学も今や女子学生が40%を占め、硬派な校風も随分変わ

りました。女子学生の傾向は、現実をしっかりと見据え、進路選択も就職活動も明確です。男子学生は控えめで、洗練された印象です。思い起こせば大学紛争の頃の学生は、学生時代に厳しさを経験した分、社会に出た時に強かったですね。現在、学生の自治活動もなく全学生のリーダーが存在しないのは残念にも思います。学生は、自由な身分だからこそ、自らが考え行動してほしい。人生で一番パワーのある年代ですから、そのパワーを学業にも、スポーツ、芸術、文化も含めた課外活動にもぶつけてくれたらと願っています。私達はそのサポートを全力で行います。

芝井 アメリカの大学にあり、日本の総合大学にあまりないもの、それはスポーツと芸術だとおっしゃった方がおられました。学問的に優れている大学は、スポーツも芸術も一流です。理事長のおっしゃるように、課外活動の重要性は本当に高いのです。学生には、指示を待つのではなく積極的に動き、自分が成長することに責任をもってほしい。そして、社会に出ると教育機関と縁がなくなるわけではないと言いたい。人生は常に「学び」です。またどこかで大学に戻るといった選択肢を忘れないでほしいのです。

池内理事長とは本当に長い付き合いですが、こういう立場で対談することになるとは、思ってもみませんでした。関西大学が「存在感のある大学」であるために、今後も、話し合いを欠かすことなく、同じ方向を見つめて動きたいものです。

池内 芝井学長は副学長の時代、「2010プロジェクト」で新学部や併設校の立ち上げに尽力されました。教育者であり、素晴らしいアイデアや行動力を備えている方で、リーダーシップを発揮されると期待しています。

本学は130年を有する「伝統」に自信と責任をもっています。しかし、この伝統に決してあぐらをかくことなく、本学関係者が一丸となってより輝ける「未来」を作り上げていく決意です。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

KU Vision 2008-2017 ▶▶▶▶▶ Kandai Vision 150

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

日本で法学・政治学を学び 母国コンゴの発展に貢献を

鉱物省鉱山局検査官の挑戦

●法学研究科 博士課程前期課程 法学・政治学専攻 1年次生
アミシ・デービッド・カブウェ さん

母国の発展を願い、関西大学で法学・政治学を学ぶアフリカ諸国の未来のリーダーがいる。第5回アフリカ開発会議で、安倍晋三首相が表明した「アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ(ABEイニシアティブ)」。

コンゴ民主共和国出身のカブウェさんは、JICAによるABEプログラム「修士課程およびインターンシッププログラム」に応募し、2015年9月から関西大学で日本の法律と政策評価制度等を研究している。また、2016年9月からは、ビンガさんとヘルミーさんも、同プログラムで関西大学に入学。それぞれの国の期待を背負う逸材が、異国で挑戦している。

アミシ・デービッド・カブウェ
■コンゴ民主共和国出身。コンゴ国立大学卒。2015年9月から関西大学外国人研究生、2016年4月に法学研究科入学。鉱物省北カタンガ鉱山局検査官。趣味はサッカー。日本食は何でも好き。

鉱物省北カタンガ鉱山局検査官という、世界有数の鉱山資源国であるコンゴならではの肩書きを持つカブウェさんの日本での生活は2年目を迎えた。初めての異国での長期生活に「日本での生活はスタートから非常に大変でした。同郷もいなくて1人で寂しい思いをしていました。ただ、徐々に慣れてきて、今は充実した生活を送っています」と笑顔を見せた。ABEプログラム2期生として、関西大学で法学・政治学を研究している。「日本は素晴らしい発展を遂げた国です。私の国はまだまだ発展途上の段階ですから、日本がなぜここまで発展したのかを学びたく、プログラムの参加を決意しました」。

コンゴはスズ(Tin)、タンタル(Tantalum)、タングステン(Tungsten)、金(Gold)など豊富な鉱山資源に恵まれている。メッキや塗料、光学機器や通信機器の薄膜、フィラメント、集積回路、医薬品、そしてスマートフォンなど多種多様な製品にこれらの鉱物を使用されている。「3TG」と呼ばれるこれらの鉱物資源は「紛争鉱物」とも呼ばれ、許可なく不法に採掘され、武装勢力が潤うケースも少なくない。1996年以降、国内紛争が続くコンゴの武装勢力の資金源を断つ目的で2010年、米国における紛争鉱物開示規制が定められた。「検査官は鉱物にかかわる取引の監視・管理などが主な仕事ですが、不正採掘や密輸などのトラブルにも対応します。コンゴと国境を共有する国は9カ国あり、国境沿いや国境を越えての犯罪行為を取り締まることは非常に困難です。課題は山積していますが、関連組織のガバナンスをはじめ鉱業の更なる発展のためには、法律はもとより技術移転などの制度を整備す

る必要があります。技術立国・日本の法制度や組織のガバナンス、教育に興味を持ちました」。

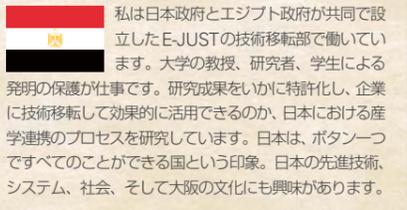
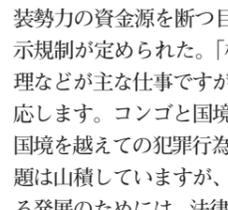
カブウェさんは関西大学で知的財産法、投資法、国際経済法、国際協力論、国際政治学などを履修する一方で、日本語の勉強にも余念がない忙しい日々を過ごしている。「関西大学(法学研究科国際協働コース)では、法学・政治学の科目を英語だけで受けることができます。指導教員の山名美加先生、大津留智恵子先生、石橋章市朗先生はじめ、皆とても親切にサポートしてくれます。さらに、関西大学には、アフリカからの招聘教授もおられるし、アフリカに関わるビジネスマンとの交流も頻繁にあります」。修士論文のテーマは「DRC's Reform of the Ministry of Mines」(コンゴ民主共和国における鉱物省の改革)。「コンゴと違い、日本は資源に乏しい国です。その日本がなぜ世界有数の技術立国にまで成長したのかを学び、コンゴへの示唆を論文としてまとめたいと思っています。日本はコンプライアンス意識が非常に高い国です。法律が整備されており、そして正しく適用する組織力・運営力があります。帰国後は、日本で学んだことの全知識を鉱物省の改革のために、そして母国コンゴの発展のために大臣にも提案するつもりです」。母国の期待を背負うカブウェさんの挑戦は続く。

ンベラニ・クリストファー・ビンガ
■コンゴ民主共和国出身。Vodacom Congo(Vodafone)勤務。弁護士。趣味は音楽、水泳、温泉。好きな食べ物はたこ焼き、お好み焼き。

外資系企業Vodacom Congoの法務部で、契約問題を担当していました。さまざまなリスクから会社を守り、技術を守るためには、いかに知的財産の保護が重要かも分かりました。関西大学は1886年に創立した歴史ある大学で、法学の名門大学であることから関西大学で学ぶことを決意しました。小さい頃から「NARUTO」などアニメをはじめ日本文化に興味があり、いつかは日本に行きたいと思っていました。ついに夢が実現しました。

アフフィ・ノハ・モハメド・サミー・モハメド・ヘルミー
■エジプト出身。アレキサンドリア大学卒。エジプト日本科学技術大学(E-JUST)で技術移転の専門官として勤務。弁護士。趣味はウォーキング、友人との散策。好きな食べ物は寿司、あんぱん。

私は日本政府とエジプト政府が共同で設立したE-JUSTの技術移転部で働いています。大学の教授、研究者、学生による発明の保護が仕事です。研究成果をいかに特許化し、企業に技術移転して効果的に活用できるのか、日本における産学連携のプロセスを研究しています。日本は、ボタン一つですべてのことができる国という印象。日本の先進技術、システム、社会、そして大阪の文化にも興味があります。



愛着ある大阪から、 イタリア料理界をリードしたい

現状に甘んじることなく、未来を切り開く料理人



●料理人
藤田 政昭 さん 一経済学部 1997年卒業

大阪・北新地に、未来を切り開く料理人がいる。関西大学卒業後、海外生活にあこがれイタリアに渡り、ミシュラン星付き店で修業を積んだ藤田政昭さん。大衆食堂を意味する前店「タベルナ・デッレ・トレ・ルマーケ」から移転する形で高級レストラン「ラチェルバ」を2015年夏にオープン。東京・銀座と並ぶ高級飲食街で、イタリア料理界、大阪、そして自分の未来のためにあくなき挑戦を続けている。

藤田 政昭—ふじた まさあき
■1973年奈良市生まれ。92年清風高等学校卒。97年関西大学経済学部卒。会社員を経てイタリアへ渡る。ミシュラン星付きレストランからナポリのピッツェリアまで、イタリア各地で幅広く修業し帰国。大阪市内を中心に阪神間のレストランで副料理長、料理長を歴任し2007年独立。大阪市南森町にタベルナ・デッレ・トレ・ルマーケを開店。15年から北新地にラチェルバとして移転し、店や料理の内容を一新した。

ラウンジ、クラブ、料亭など高級飲食店がひしめく北新地。地上31階、地下2階の高層ビル新ダイビル2階に、イタリア料理店「ラチェルバ」はある。重厚なドアに看板は無く、料理は季節ごとに変化するコース料理一本のみ。大阪近郊の食材を積極的に使用し、生産者の想いをくみ取り、親交の深い現代作家による器に盛り付ける。「イタリア各地の郷土料理の良さを伝えたくて前店『タベルナ・デッレ・トレ・ルマーケ』をオープンしました。全国に同じような店がはやりましたので区切りを付け、『ラチェルバ』として北新地に移転し、店や料理の路線を変更しました。職人として、自分の経験と感性を試したかったからです」と藤田さんは言う。

現状に甘んじることなく挑み続けている。アメリカンフットボール部での練習漬けだった高校時代に「関西大学のアメリカンフットボール部にあこがれ、大学のイメージも自分に合っていると思い入学しました。入学後、他のスポーツにも興味が湧き、体育会アメリカンフットボール部には入らず、高校OBのアメフットチームに所属しながら、学生プロレスや空手などにも打ち込みました」と懐かしむ。「2年次生まではスポーツ三昧、3年次生からは読書にのめり込み、坂口安吾の『墮落論』をきっかけとして、三島由紀夫や立花隆、寺山修司などさまざまなジャンルの読書に没頭しました」。同時に海外への興味が湧き、夏季休暇などを利用



してアメリカやジャマイカなどを旅した。卒業後は外国語教室を展開する企業に就職したが、海外生活へのあこがれは募るばかり。「どうすれば海外で生活ができるか考えた結果、料理人なら食と住に困らない」と考えついた。当時の上司に相談すると、「今から料理学校に行くより、イタリアンやフレンチで勝負するなら現地で直接学んだ方が良いでしょう」と背中を押され、入社半年で円満退社した。

イタリア中部の都市フィレンツェに単身渡り、飛び込み交渉で地元の名店「リストランテ・チブレオ」にたどり着いた。系列のトラットリア、カフェのサポートも任せられ、午前7時から翌日午前2時過ぎまで働く日々。「玉葱のみじん切りから始まり、とにかく良く働き続けたけど、高校時代からスポーツをしていたお陰で、体力には自信がありました。この修業は良い経験になりました」と当時を振り返る。異国で日本人と接する暇もなく働いた。イタリアに渡る時、家族や友人達に盛大に送り出されたので、逃げるわけにはいかなかった。「俺は料理人だ」と思えるまでは帰国しない。ミシュラン星付き店で勉強し、ポジションを任せられるまで挑戦しようと決心していました。イタリア最大都市ミラノの2つ星店をはじめ、洗練された北部で修業を積み、その後、ナポリやシチリアなどで郷土料理の奥深さに魅了され南部を回った。

帰国後は阪神間のレストランで実績を残し、2007年に独立。当時は珍しいスタイルのイタリア郷土料理「タベルナ・デッレ・トレ・ルマーケ」は多くの雑誌やWEBで紹介された。脚光を浴びる一方で、イタリア料理界に漂う閉塞感が増していた。「フレンチが業界を席巻しており、イタリアンは黄金期から下降線をたどっています。大阪から日本のイタリア料理界をリードできる人間になりたい」。転換期には未来派のような「radical(革新的な)」さが必要になると感じ、1913年にフィレンツェで発刊された機関紙「LACERBA」を店名に掲げ、料理も創作イタリア料理に一新した。「料理に感動してもらえようような店にしていきたい」。藤田さんの挑戦はまだ続く。



■研究最前線

東アジアの文化交渉を研究

複合的な視野から
アジアの文化を捉える

文化の形成と展開、受容と変容を追う

●文学部
吾妻 重二 教授

古来、中国や朝鮮などの外国から文物や思想、文化を取り入れてきた日本。外国文化を抜きにして日本の文化を考えることはできず、他国との文化的接触を視野に入れることで、さらに日本文化を理解できる。これは日本に限らず、どの国、どの文化においてもあてはまる事象といえる。吾妻重二教授は、国境を越えた視点から、東アジアにおける儒教思想や儀礼の文化交渉を研究する。



■越境する文化の「受容」と「変容」を追う

—中国思想史や朱子学に興味を持たれたきっかけとは？
学生時代、授業で『孟子集注』を読んだのがきっかけです。孟子に朱熹が注釈を付けた書物ですが、学生当時の私の漢文力でも読むことができる明晰な文章に感銘を受け、内容にも興味を持ちました。朱子学は古臭いとか封建的だとか言われ、誤解されることが多いように思います。朱子学には「聖人学んで至るべし」という原則があります。これは「人は誰でも学問によって聖人になることができる」という平等主義的な発想。生まれや家柄を問わず、人の持つ可能性を引き出そうとするものです。研究を始めたのは、朱子学への誤解を解き、再評価してほしいという思いを持ったからでもあります。

—現在は文化交渉学の視点から、儒教や東アジアの思想へと研究の領域を広げられています。ご専門の文化交渉学とは？
一言でいうと「文化は交渉することで形づくられる」という視点を基本とします。どのような文化でも、他との交流や接触を持たず、ガラパゴス諸島のように孤立して進化してきたという例はなく、必ず他の地域の影響を受けて発展しています。たとえば中国は仏教の影響を強く受けていますが、仏教の教えはインドから来ている。また、日本の伝統文化を代表する茶道は中国に起源がある。各国の文化は固定されておらず、他の地域の文化を受け入れ、自国の文化や慣習に合わせて変化させているのです。「受容」と「変容」は文化交渉学の重要なキーワードですね。

■儀礼をはじめ、さまざまな文化交渉を世界へ発信

—最近はどのような研究をされているのですか？
今、研究していることの一つに儒教の「儀礼」があります。儒教では儀礼が発達しており、冠婚葬祭の儀式はその中で特に重要とされます。前述の朱熹が著した『家礼』——これは文字通り家の中で執り行うべき冠婚葬祭の儀式マニュアルで、朱子学と共に



に東アジアに広く受容されました。しかし、ほとんど研究されていなかったため、私の方で資料を整理し、『家礼文献集成 日本篇』全六冊(関西大学出版部、2010～2016年)にまとめました。また、2009年には韓国の国学振興院の朴元在先生と国際シンポジウムを開催し、論文集『朱子家礼と東アジアの文化交渉』(汲古書院、2012年)を出版。15年には「文化交渉学研究拠点(ICIS)」で国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」を開催し、その論文集も出版することができました。

—今後の抱負をお聞かせください。
儀礼に関しては、ベトナムの『家礼』を追いたいと思っています。また、近代日本の漢学にも注目しています。日本の学問は明治維新により、それまでの古い中国の漢学から新しい西洋のものへ瞬時に切り替わったわけではない。日本が近代化を遂げて行く中で、漢学や漢詩は大きな役割を果たしました。また、日本における漢詩の教養は明治時代に最も普及し、新聞にも漢詩欄が設けられる程でしたが、その研究はほとんどされていません。まずは漢学者、儒学者を掘り起こし、その著作を整理するところから進めたいと思っています。



▲吾妻教授の著書

■東アジア文化交渉学の研究拠点として

—2012年、関西大学東西学術研究所内に文化交渉学研究拠点が設置されました。開設の経緯とその成果についてお聞かせください。
2007年、文化の交渉に関心を持つ先生方と共に、文部科学省グローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」を申請し、採択されました。これにより、08年に文学研究科内に文化交渉学専攻、11年に東アジア文化研究科・文化交渉学専攻を開設。12年から文化交渉学研究拠点を設置し、グローバル

COEとしての研究機能を引き継いで発展、充実させ、14年より私がそのリーダーを務めています。

近年、文化交渉学においては、複眼的な視点からさまざまな成果が生まれています。私も中国のみを研究対象にしていたのが、日本や琉球、韓国・朝鮮、ベトナムへと関心が広がりました。考えてみれば当然のことで、儒教一つとっても東アジア全般に広がっており、その歴史の究明には中国はもちろん、東アジア各国について知る必要があるわけです。

—留学生の活躍も目覚ましいと伺っています。
東アジア文化研究科には東アジアからの留学生が多く、その院生の博士論文の一つに「ベトナムにおける『二十四孝』の研究」があります。「二十四孝」とは中国の有名な教訓話ですが、日本の御伽草子やベトナムにも同様の話が伝わっており、それらの国々を知る者にしかできない研究と言えます。その他、「京城帝国大学における近代韓国儒教研究の展開」などもあり、こちらも儒教を東アジアの文化交渉という視点で取り上げた新しい研究成果と言えます。また、修了生は北京大学、台湾大学、ベトナム国家大学といっ

た名門大学の専任教員となって活躍しており、その研究は海外でも高い評価を受けています。東アジア文化研究科を東アジアにおけるハブ研究科とし、彼らとのネットワークを生かして研究を深めていけるよう期待しています。

■関西大学のもう一つの源流、泊園書院

—一方で、先生は「泊園書院」の研究もされています。どのような学問所だったのでしょうか？

泊園書院は、江戸時代後期の1825(文政8)年、藤澤東咳により大坂に開かれた漢学塾です。東咳の子の南岳、南岳の子の黄鵠・黄坡、そして黄坡の義弟・石濱純太郎に受け継がれ、その教えを受けた門人は、1948(昭和23)年に閉じられるまでの120余年の間で1万人を超えるとされています。江戸から明治・大正・昭和前期に渡る激動期を歩んだ漢学塾はほとんどありません。適塾が1868(明治元)年に、懐徳堂が1869(明治2)年に閉校となった後、近代的学制が整う明治中期まで、大阪の学術と教育を維持、振興してきた大阪最大にして最高の学問所と言えます。

—泊園書院が関西大学のルーツの一つとされる理由とは？

泊園書院は、政界・官界・実業界・教育界・ジャーナリズム・学術・文芸などの分野に多くの人材を送り出しました。黄坡と石濱は関西大学で長く教鞭を執り、黄坡は本学初の名誉教授、石濱は本学初の文学博士号取得者となりました。さらに、石濱は本学に「泊園文庫」を寄贈し、東西学術研究所の創設、文学部東洋文学科の開設等に尽力しました。大阪を代表する学者であった彼らを通じ、江戸時代以来の長い歴史を持つ泊園書院の知的伝統が関西大学に合流しているのです。

10月30日には、関西大学創立130周年記念シンポジウム「泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈」を開催しました。また、梅田キャンパスでは10月末より、泊園書院の伝統を受け継ぐ「泊園古典講座」も開講しています。これまで、泊園書院については「知る人ぞ知る」存在でしたが、その存在と意義の大きさは今後ますます明らかになっていくことでしょう。



▲シンポジウムのポスター

＜泊園書院と関西大学ゆかりの人物＞



▲泊園書院(もと分院、のち本院。現中央区島之内1丁目) 1825年に泊園書院を開く 関西大学初の名誉教授 関西大学初の文学博士号取得者

◀泊園書院址記念碑：泊園書院の建物は戦災で焼失したが、戦後になり、黄坡の子・藤澤桓夫が跡地に記念碑を建立。2010年、関西大学以文館北側に移置された。

研究最前線

超小型視野検査システムの研究・開発

緑内障診療における HMD 型視野計を開発

視野異常を早期発見し、失明回避へ

◎システム理工学部 小谷 賢太郎 教授



厚生労働省研究班の調査によると、日本人の失明原因の第1位は、緑内障。視神経を傷つけ視野欠損から失明へと至る可能性のある疾患だが、初期の視野障害はほとんど自覚できず、自覚した時には、かなり進行している場合が多い。現在の医学

では、失った視野や視力を取り戻すことは難しいとされ、小谷賢太郎教授は、緑内障の早期発見、早期治療を実現するための超小型視野検査システムを研究・開発。企業と連携し、国立研究開発法人 日本医療研究開発機構 (AMED) の医工連携事業化推進事業に申請し、今夏採択された。2018年春の上市、緑内障検査の健康診断導入を目指す。



ヒトの運動と感覚のメカニズムを研究、応用

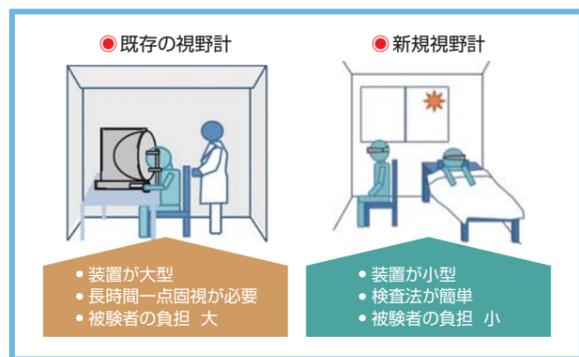
—小谷先生の研究はどのようなものですか？

人間はさまざまな情報を無意識に発信しています。例えば物が見えた時の眼球が動き始めるまでの時間や、ターゲットの近くでの特異な動きなどがそうで、運動と感覚に関する中枢系の情報処理過程を脳波、筋電位などの生体信号を用いて探ってきました。生体からの情報を引き出し数値化できれば、これまで自覚的なアンケートなどでしか調査できなかった“疲労の程度”なども客観的なデータを得られ、医療機器や福祉工学システムへの応用につながります。

「視野計測システム」(視線移動情報を用いた HMD 型超小型視野検査システム)の開発

—緑内障による失明回避のためには早期発見が重要

日本緑内障学会が行った大規模な疫学調査(多治見スタディ)では、40歳以上の有病率は5%。20人に1人の割合で緑内障患者がいることになります。初期には自覚できないため発見が難しく、実は緑内障と気付かず過ごしている人がほとんどで、潜在的な患者が非常にたくさんいると思われまます。症状が出て眼科を受診した時には、すでに中期から末期とかなり進行している場合が多く、失明に至る可能性もあります。視野に見えない部分ができる“視野欠損”が緑内障の代表的な症状であることから、視野欠損を早期発見すれば早期治療が始められ、失明などの重篤な状態に進むリスクを減らすことができます。



精密な検査を実施する前段階の健康診断レベルで、視野欠損が判定できる検査装置を利用できれば、潜在的な患者と視野異常がない人とのスクリーニングができ、早期治療も可能です。眼科で多く使われている既存の視野計は、一般的に暗室内で顔を固定し、計測にも時間がかかるため患者の負担が大きく、健康診断の場合など、健常者を含んだスクリーニングには不向きでした。そのため、場所を選ばず多くの人を短時間で検査できる視野検査装置は、インフラ整備の面からも必要とされています。

我々は長年、眼球運動の計測、検知法を研究し、産業応用を模索していました。関西大学が積極的に医工連携を行うなかで医療応用を考え、2010年頃から、眼球運動計測の技術を活用し、視線移動情報を用いて視野異常を判定する、新しい視野計測システムの開発を始めました。



—先生が開発された視野計のメリットは？

医工連携で、大阪医科大学の眼科教室と共同で研究開発を行い、1号機、2号機を経て改良を重ね、「目の前だけに暗室を作れば良いだろう」という考え方で、HMD型(ヘッドマウントディスプレイ型、小型のディスプレイを頭に装着するタイプ)を導入。実現化へと大きく進展しました。

新しい視野計は、既存の視野計と同等の能力を持ちながら、さまざまな面でメリットがあるため、大きな市場規模があると想定していました。

新しい視野計の主なメリット

- 視線を固定せず測定できるため、被験者と視能訓練士の負担を軽減できる。
- 簡便に短時間(片眼5分程度)で、被験者の姿勢を問わず測定が可能。
- 小型かつ軽量のため、暗室や測定スペースがほぼ不要。
- ディスプレイに表示される光点を目で追っただけで、視野欠損の有無や位置が検知できる。
- 既存の視野計(ハンフリー視野計)よりも低価格。

2018年3月の上市に向けて

—イノベーション創生センターを拠点に事業化に向けて開発中ですが、今後の展望は？

前述したように大阪医科大学との連携で改良を重ね、それまでは特許の形で知的財産として保護していましたが、外部に向けて積極的に発信し模索できるようにと、2015年次世代医療システム産業化フォーラムで発表。ものづくり企業である株式会社昭和に興味を持っていただき、AMEDの医工連携事業化推進事業に申請し、今夏採択されました。

国からの経済的なサポートが叶い、現在、イノベーション創生センターにおいて、急ピッチで製品化を進行中で、ミーティングを重ねる毎日です。企業からは、ハードウェア担当の方、技術担当の方、時には外注の業者にも来ていただき、実際に病院で使用するための量産型試作品の完成に向け、詰めの作業に入っています。HMDからすべて開発しますので、プロジェクトの代表として難題もありますが、充実した日々を過ごしています。

AMEDからは、早い製品化を望まれています。我々研究者側としては、常に改良を重ねたいとの思いもありますが、国としては、医療費削減の効果を早く実現しなければなりませんし、既存の視野計は海外製ですので、早く国内製品を導入したいという面



株式会社昭和の方々とのディスカッション



▲小谷教授と、開発中の HMD を装着した理工学研究科の高田俊輝さん

もあるのだと思います。来年は試作品の試験の実用化をし、2018年3月には、市場に新製品として出す予定です。

これまで自分の研究を論文発表することで、間接的には社会貢献につながっていたかもしれませんが、しかし、国の機関から経済的なサポートがあり、企業と共同で製品化する今回のプロジェクトは、患者に対して直接的な貢献が可能で、これまで経験のないアプローチとして、強い意欲を持って臨んでいます。

—他大学や企業と共同研究、事業展開される意義は？

我々研究者の立場では、研究成果を基に可能性を提示することはできますが、社会に役立つものに発展するかは分かりません。基礎研究、応用研究から製品化、製造研究にステップアップする際には、大きな難関・障壁がありますが、それを乗り越え、実現可能な物を作らなければなりません。

医大との連携において、技術者側は、新しい技術をつぎ込んでスペックが高いものを開発しがちですが、医療従事者の立場からは、患者に優しい低侵襲性でコストが低いものでないと製品化できないと指摘されます。互いの考え方をうまくすり合わせるのが大事だと気付かされます。また研究者には、売れる物を作るノウハウはありません。売るための技術も知識も十分ではないので、ベンチャー企業で苦戦する場合があります。

今回は、コスト感企業、コアな技術は我々研究者が分かるため互いのメリットが大きい。また学生にとっては、イノベーション創生センターで実際に企業の方と共同作業をする中で、将来像である技術者の在り方を目の当たりにし、学ぶことも多いでしょう。双方win-winの関係になっていると思います。

—他の研究内容についてお聞かせください。

他の研究では、脳波、筋電位などの生体信号を用いた研究の応用として、触覚インタフェースの開発を進めています。また、末梢神経系における活動特性や、運動記憶機能を基に、視線入力インタフェースの開発や医療機器への応用も模索し、リハビリテーション工学、医用診断技術、福祉工学、入力デバイス、脳機能イメージング、VR(バーチャルリアリティ)などへの応用も模索中です。

世の中には使いにくいものがたくさんあります。それを使いやすい、使いやすいもの、使いやすいものは売れるものでもあります。ヒューマンインタフェースを究め、自分で探索しながら操作の仕組みが分かり、直観的に操作できるような、人と機械の“界面”を作り出したいですね。

■創立130周年記念特集

《関西大学創立130周年記念式典・祝賀会を開催》

伝統への自信 未来への考動

—「学縁」を世界に広げよう—

関西大学は11月4日、これまで進めてきた創立130周年記念事業の集大成として、千里山キャンパスにおいて記念式典と祝賀会を挙行了。関西大学は、「正義を権力より護れ」を建学の精神とし、「学の美化」を学是に掲げて社会・市民の啓発と教育に取り組んできた。130周年を機に、新しい歴史の幕開けとして、これまで受け継がれてきた知と精神を確実に継承し、社会の要請に応える学園の創出に、一丸となって邁進することを宣言した。



当日、BIGホール100で開催された式典には、来賓・大学関係者約800人が出席し、創立130周年を盛大に祝った。

式典は、安部善博常務理事による開式の辞で開幕し、続いて学歌が斉唱された。池内啓三理事長は、130周年を迎えた謝意や決意を表するとともに、「今日は、未来永劫への厳粛な接点。肝心なのはこの130周年が、未来に向けた出発点となることです。予測困難な時代にあって、未来を問い、対話を重ね、答えを模索し、挑戦する。そんな姿こそ、我々が目指す将来像です」と、本学の更なる発展に向けて力強く宣言し、本学構成員が一丸となって、より輝ける「未来」を志向していくことを誓った。また、次なる20年である創立150周年に向けての行動指針「Kandai Vision 150」を発表。メインテーマ



では、「多様性の時代を、関西大学はいかに生き抜き、先導すべきか」を設定し、今後ますます本学を取り巻く環境が厳しくなるとの認識のもと、将来を見据え、よりスケールの大きなビジョンを描いた。

芝井敬司学長は、「創設から数えて130年の時を刻み、かくも立派な大学に成長することができました。そして、数々の困難を乗り越えて、創立者たちの熱さと名誉ある伝統を、今ここに受け継いでいることを、大いに誇りとするものであります。私たちは、関西大学の過去を受け継ぎ、それを未来の世代に受け渡していく責任を担う存在です」と、創設から今日までの本学の歩みを振り返るとともに、未来に向け勇気を持って進む意思を伝えた。

来賓紹介の後は、水落敏栄 文部科学副大臣、鎌田薫 一般社団



法人日本私立大学連盟会長、河田悌一 日本私立学校振興・共済事業団理事長らが祝辞を述べ、著名な校友等からのビデオ・メッセージの上映も行われた。さらに、特別公演として第一線で活躍中の能楽師・狂言方の野村萬斎氏による『三番叟』と、有形文化財である山本能楽堂を拠点としているシテ方の山本章弘氏(校友)による『高砂』が上演され、式典に華を添えた。

矢野秀利常務理事による閉会の辞をもって式典は終了。会場を100周年記念会館に移して行われた祝賀会では、応援団による演舞・演奏が披露されたほか、サプライズゲストとして、フィギュアスケーターの宮原知子さん(文1)と本田真凜さん(関西大学中等部3年生)も登場し、130周年という佳節を祝した。



● 関西大学創立130周年記念展示会 130年におよぶ伝統の軌跡を展覧



▲オープニング・セレモニーの様子

第1会場の関西大学博物館では「関西大学のちから～伝統への自信 未来への考動～」をテーマに、「地から～大阪」「道から～伝統」「智から～叡智」「馳から～スポーツ」「千から～コレク

10月5日から11月14日まで、千里山キャンパスの関西大学博物館と大阪歴史博物館において、関西大学創立130周年記念展示会「関西大学のちから」を開催した。

ション」の5つの「ちから」が象徴する本学所蔵の名品を紹介。

本学創立者ゆかりの品から130年の軌跡、近世・近代に大阪で活躍した大坂画壇の絵画、歴代アスリート達の栄光の記録、校友からの寄贈を含む博物館コレクションの数々が展示された。天六キャンパス体育館の部材を用いたウクレレや、体育会アイススケート部の宮原知子さん(文1)のメダルなどの名品に、来場者はじっくりと見入っていた。

また、第2会場の大阪歴史博物館では「関西大学蔵 本山コレクションの精華」をテーマに、大阪毎日新聞社元社長の本山彦一氏が蒐集した重要文化財や重要美術品を中心とする考古学資料を公開。学外での一挙展覧は初めてということもあり、貴重な品々を一目見ようと多くの人が訪れた。

- ちから 地** (大阪)
 - 創作者 児島惟謙
- ちから 智** (重宝)
 - 関西法律学校講義録
 - 木村兼殿堂 (花蝶之図)
- ちから 千** (コレクション)
 - タブアヌ仮面 (ミクロネシア)
- ちから 馳** (スポーツ)
 - バンクーバー五輪 フィギュアスケート銅メダル (高橋大輔氏所蔵)

■創立130周年記念特集

◎関西大学創立130周年記念事業

イノベーション創生センターが竣工 産学官連携を牽引する “ハブ大学”として

今年4月、社会連携部に産学官連携活動の新拠点として「イノベーション創生センター」を設けた。

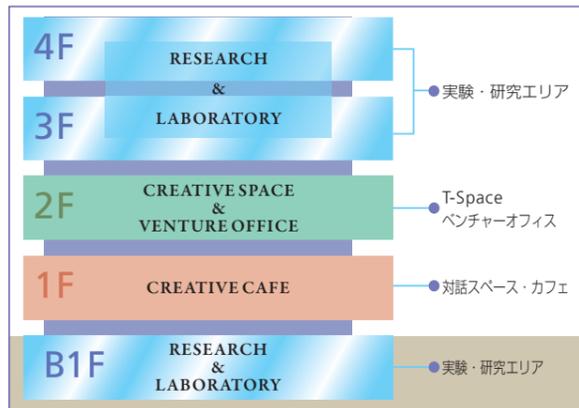
同センターの設置は創立130周年記念事業の大きな柱の一つであり、産学官連携活動の飛躍的な活性化とベンチャー支援・起業家育成を実践する。また、理工学系の先端研究に加え、マーケティング・リサーチ等の社会科学系の分野を配置することで、人文・社会・自然科学系の枠組みを超えた、教員・学生・企業・研究機関等との「協働」による本格的なイノベーションの創生を可能とする。

9月竣工の施設は、地上4階地下1階建て。1階の対話スペース・カフェは、自由な発想を生み出せる共有のリラックススペースであり、セミナーや交流会の場としての機能も備えているほか、研究成果の展示等も行える。2階のT-Spaceは、ビジネスモデルの構築・応用および学問領域・産学官の枠を超えた対話を行うスペース。また、起業支援のためのベンチャーオフィスは、大学発ベンチャーの拠点オフィスとして活用できる。地下1階、地上3・4階の実験・研究エリアは、企業との共同研究はもとより、オープンイノベーションを促進する「実験・研究スペース」として、産学官連携の新たな環境を形成する。

同センターの竣工により、50社を超える企業が研究に加わり、研究者・技術者との共同研究等がすでに進められている。関西大学は、創造的かつ革新的な研究成果を持続的に社会に発信する“ハブ大学”として、本センターをはじめ産学官連携に強い大学を具現化する。



イノベーション創生センター



2F: T-Space



1F: 対話スペース・カフェ

◎関西大学創立130周年記念事業

イノベーション創生センター竣工記念シンポジウムを開催 関西大学の技術と産官を連携し、イノベーションを生み出す

関西大学は、4月に設置した「イノベーション創生センター」の活動拠点施設を9月12日に竣工し、同月17日、竣工記念シンポジウムを千里山キャンパスにおいて開催した。テーマは「先端科学技術とイノベーション」。シンポジウムは2010年に「クロスカップリング技術」でノーベル化学賞を受賞した根岸英一氏への関西大学名誉博士称号贈呈式で幕を開けた。

シンポジウムの講演は、「Pursuit of My Dreams for Half-a-Century 大きな夢を持ち、それを追い続けよう」と題し、根岸氏により行われた。続いて、関西大学卒業生であり株式会社サムライインキュベート代表の榎原健太郎氏による話題提供をもとに、大阪大学名誉教授の宮原秀夫氏、パナソニック株式会社特別顧問の大坪文雄氏を交えたパネルディスカッションが行われ、学生や一般の来場者約700人は熱心に耳を傾けていた。



根岸英一氏へ関西大学名誉博士称号を贈呈



榎原健太郎氏



宮原秀夫氏



大坪文雄氏



竣工記念シンポジウム

第39回関西大学統一学園祭を開催

11月3日から6日の4日間、千里山キャンパスにおいて、2016年度の関西大学統一学園祭が開催された。今年のテーマは「RE130RN」。これは、関西大学が今年11月に創立130周年を迎えたことにちなんで、“生まれ変わり”という意味のREBORNの「BO」を「130」という数字に変えたもの。大きな節目を迎えた今こそ、新たな学園祭の歴史を作りたい!という、関大生たちの思いが込められた。

今年も多くのサークルやゼミによる研究発表をはじめ、模擬店、フリーマーケット、ステージ企画、講演会等、さまざまなイベントや催しでにぎわいを見せたほか、11月3日にはゴー☆ジャス、コマンダンテ、尼神インターによるお笑いライブ、5日にはSHISHAMOを迎えてライブを開演し、連日、会場は大いに盛り上がった。さらに、統一企画構成委員会が運営する毎年恒例の3大イベント「K.U.ROCK FEVER 14th」、「Kandai Dance FESTIVAL.2016」、お笑い王決定戦「LAUGH & PEACE」も行われ、観客を巻きこんでの熱いパフォーマンスが繰り広げられた。また、6日には俳優の小出恵介氏による講演会、夕方からは悠久の庭で「後夜祭」が開催され、ドラマチックなフィナーレを迎えた。

RE130RN



西日本最大級とされる学園祭。学園祭実行委員の学生約750人が運営

■創立130周年記念特集

●関西大学創立130周年記念事業 《梅田キャンパス開設》

地域・社会人・大学が共に発展できる新拠点
「KANDAI Me RISE」が発進

関西大学は、創立130周年を機に更なる飛躍を目指し、10月1日、大阪市北区鶴野町に「関西大学梅田キャンパス(愛称 KANDAI Me RISE)」を開設した。同キャンパスのコンセプトは、「人を導き、繋ぎ、自ら起こし、創る“人”を育成～“考動”を実践する場の創出～」。大学関係者のみならず、多くの人が集い、にぎわう交流の場になることを目的とし、社会人向けの学び直し大学院プログラムや各種生涯学習講座をはじめ、起業支援や会員制の異業種交流サロンなど新しい事業を展開する。また、館内には「キャリアセンター梅田オフィス」もオープン。関大生のキャリア・就職支援体制も一層強化され、最新キャリア情報が集積する就職・進路相談の場としての更なる活用に期待が寄せられる。



梅田キャンパス コンセプト



▼梅田キャンパス事業の3つの柱とキャリアセンター

■スタートアップ支援

- ＜起業マインドを醸成し、多様な人材を育む＞
- ・常駐コーディネーターへの起業相談が毎日可能
- ・同じ志を持つ仲間と出会う
- ・専門家による無料セミナーを毎週受講できる

■会員制異業種交流サロン

- ＜異業種交流を促し、イノベーションを創出＞
- ・サロン内の2000冊以上の図書が自由に利用できる
- ・会員同士のネットワーク構築ができる
- ・会員向けセミナー・交流会などに参加できる
- ・会議室、自習用デスク、コピー機等の利用ができる

■社会人学び直し・生涯学習

- ＜社会人を対象にさまざまな学びを提供。天六キャンパスの精神を継承する＞
- ・「社会人学び直し大学院プログラム」などを受講できる
- ・受講者は休日に千里山キャンパス総合図書館で調査・研究ができる
- ・異業種の方々と共に学び、交流できる

■キャリアセンター 梅田オフィス

- ＜関大生の就職活動を力強く支援＞
- ・就職活動の相談や参考図書の閲覧ができる
- ・インターネットの利用や各種証明書発行など、多様なサービスが受けられる
- ・企業研究会や採用説明会を開催
- ・卒業生就業支援サービスを展開

▼梅田キャンパス フロアガイド

- TSUTAYA BOOK STORE
●スターバックス コーヒー
書店とカフェ機能を加えたBOOK & CAFEを設置。情報発信機能も有し、一般の方々にも広く利用いただけます。
- スタートアップ支援窓口「スタートアップカフェ」
●梅田キャンパスオフィス
起業家育成支援窓口として「スタートアップカフェ」を設置。スタートアップに関連する無料のセミナーやイベントを随時開催します。
- 会員制異業種交流サロン「KANDAI Me RISE 倶楽部」
ビジネスマンを対象とした会員制異業種交流サロンを設置。上質な空間で会員同士を繋ぎ、異業種間のネットワーク構築による新たな価値創造の場として展開します。
- 会員制異業種交流サロン「KANDAI Me RISE 倶楽部」
●多目的ルーム「KANDAI Me RISEラボ」
多目的のルームでは、セミナーやワークショップをはじめ、懇談会など交流イベントでの利用が可能です。
- キャリアセンター梅田オフィス
学生の就職活動支援を実践する場の提供とともに、立地を活かした卒業生就業支援事業も展開します。
- 各種教室・セミナールーム
「社会人学び直し大学院プログラム」における一部の講義エリアとしての利用に加え、中～少人数対象の生涯学習や起業支援等の関連セミナー実施での利用が可能です。
- 各種教室・セミナールーム/ホワイエ
生涯学習等実施のメインエリアです。休憩のためのホワイエも設置しており、各種情報発信の場としての機能もあります。
- 大ホール「KANDAI Me RISE ホール」
大人数を対象とした講演会など、生涯学習での利用ができます。ケータリング対応機能も持たせており、レセプション等の実施も可能です。

●関西大学創立130周年記念事業

千里山キャンパスへの新たな玄関口
「新アクセス・エリア」が竣工



千里山キャンパスへの新たなアクセス・エリアが完成し、8月31日に竣工式が執り行われた。

関西大学創立130周年記念事業の一環として開設された新アクセス・エリアは、エスカレーターや憩いの広場、植樹による緑の空間をスマートに演出することで、学生や地域住民の方々の利便性と快適性を高め、人に優しいアプローチを創出。通学時の混雑緩和はもちろんのこと、同キャンパスは吹田市における災害時の一時避難地として指定されているため、有事の際の安全・安心な移動経路としての価値も併せ持っている。

野球専用グラウンド
「KAISERS BASEBALL FIELD」が完成



8月25日、千里山キャンパスにおいて、野球専用グラウンド「KAISERS BASEBALL FIELD」完成に伴う竣工式が挙行された。新グラウンドは、1970年から正課体育授業や課外活動等に使用されてきた千里山北グラウンドを改修し、野球専用グラウンドとしてリニューアルしたもので、内野に黒土、外野に人工芝を使用。

当日は、池内啓三理事長や楠見晴重前学長ら10人による始球式が行われ、マウンド付近から捕手目掛けて一斉に投げ込むという斬新な光景に、集まった野球部員達から拍手と歓声が沸き起こった。その後、内覧会と竣工式が執り行われ、関係者が本グラウンドの発展と繁栄を祈願した。

■ 社会貢献・連携事業

◎ なにわ大阪研究センターと関西国際空港のコラボ展示イベントを開催

大阪の魅力を空港から世界の人々へ



1 巨大日本刀フォトスポット 2 「平家物語絵巻」の超高精細デジタル化画像
3 4 プロの技でひかれた「和食だし」を振る舞った「WASHOKU DASHI BAR」
5 大岡春ト「浪花及瀬川沿岸名勝図巻」 全長16メートルの拡大版レプリカ

10月18日から31日まで、関西国際空港第1ターミナルにて、展示イベント「大阪の歴史・文化魅力体験プロジェクト」が開催された。このイベントは、大阪を中心とする地域研究の拠点として次世代への歴史・文化資本の継承を目指す「関西大学なにわ大阪研究センター」の取り組みの一つ。最先端デジタルテクノロジーを研究する総合情報学部、歴史的文化遗产の研究を推進する文学部、時代に即したコミュニケーションのかたちを追求する社会学部の文理融合の研究活動でもある。

会期中、1階国際線到着ロビーでは、85インチ8Kディスプレイによる『平家物語絵巻』の超高精細デジタル化画像を世界で初公開したほか、刃文が美しい名刀「国宝 吉房」を拡大出力した巨大日本刀フォトスポットも設置した。また、2階国内線出発ロビーでは、全長16mに及ぶ大岡春ト「浪花及瀬川沿岸名勝図巻」のレプリカと映像コンテンツを展示。集まった観光客は、展示物の鮮明な映像や迫力に驚いていた。

さらに、21日から23日には特別企画として、大阪のだし文化を体験できる「WASHOKU DASHI BAR」をオープン。エコーラ 大阪(辻調グループ)協力のもと、プロの技でひかれた「和食だし」1,400人分を無料提供した。だしには環境都市工学部の研究によって復活した名水「大阪天満天神の水」が使われており、国内外の観光客から「おいしい!」「ほっとする」と、喜びの声が上がった。

◎ 総合情報学部が「360° frontier」展を開催

ドローンによる空撮映像で高槻市の魅力を発信



▲ハコスコ・デザインワークショップ ▲360° frontierツアー

総合情報学部は10月1日から31日、高槻市との連携プロジェクト「360° frontier」展をグランフロント大阪ナレッジキャピタルにて開催した。

「360° frontier」は、関西大学創立130周年記念事業の一環として、高槻キャンパスに拠点を置く総合情報学部の教員と学生が主体となり、企業とも連携しながら取り組んできたプロジェクト。総合情報学部の情報技術と映像コンテンツ制作の専門性を生かし、ドローン(無人航空機)と全方位カメラを用いて制作した映像作品によって、地域の魅力発信を行ってきた。

会場では、高槻市内にある「今城塚古墳」の空撮映像、「摂津峡

公園」の桜や紅葉、「こいのぼりフェスタ」を上空から眺望できる映像作品、オーストリアで開催された世界最高峰のメディアアート祭典「アルスエレクトロニカ・フェスティバル2015」に出展した体験型作品など、2年間の活動成果が紹介された。また、15日・16日には、直径2.6メートルのドーム型スクリーンを3台設置し、臨場感と迫力のある高精細映像を体験できる特設展をナレッジキャピタル内のスタジオで開催。全方位映像を個人でいつでも楽しめるオリジナル・ビューワーを制作する「ハコスコ・デザインワークショップ」や「360° frontierツアー」も実施され、多くの参加者でにぎわった。

◎ 新聞社六社トップによるパネルディスカッションを開催

関西から考える新聞の“これまで”と“これから”



10月22日、関西大学は創立130周年と梅田キャンパス開設を記念して、「新聞六社トップによるパネルディスカッション」を梅田キャンパス「KANDAI Me RISE」で開催した。

各社の幹部が経営・編集方針を越え、これまでにない形で集結したこのイベントは、マスコミ業界で活躍する関西大学OB・OG組織「関西大学マスコミ人会」の協力により実現。学生の幅広い社会的見識の向上に資することを目的に開催され、本学を中心に京阪神の大学生、併設校の高校生ら約300人が詰め掛けた。

▲6新聞社の幹部を招いたパネルディスカッションでは熱い議論が交わされた

当日のパネリストは、朝日、京都、神戸、産経、毎日、読売の6新聞社の幹部。社会学部の黒田勇教授による司会のもと、昨今のメディア環境の急激な変化の中で、関西の新聞メディアはどのような役割を担うのか、過去から未来に向けて各社からさまざまな提言がなされた。その後の学生・生徒による質疑応答では、取材の在り方や、ネットと新聞との関係など、多様な質問が投げかけられ、熱い議論が交わされた。

◎ 関西大学協賛の「大阪マラソン2016」開催
約700人の関大生が大活躍



10月30日、今年で6回目となる「大阪マラソン2016」(大阪府・大阪市・一般財団法人大阪陸上競技協会主催)が開催された。大会のスローガンは「みんなでかける虹。」沿道には133万人の人々が詰め掛け、公募により選出された約3万2,000人のランナーに熱いエールを送った。

関西大学は第1回目から協賛団体として大会運営に協力し、地

元「大阪」を盛り上げるためにさまざまな形で貢献してきた。今大会も、ランナー40人をはじめ、給水ボランティア400人、チャリティ募金ボランティア35人、語学対応ボランティア22人、清掃ボランティア19人など、多くの学生と教職員が参加。沿道では「ランナー盛上げ隊!」として、応援団、チアリーディングサークルCLAIRS、ダブルダッチ会Mix Package、吹奏楽サークルBisが熱く楽しい応援パフォーマンスを繰り広げ、大会に彩りを添えた。

また、28日から30日にはインテックス大阪で「大阪マラソン EXPO 2016」が開催され、昨年に引き続き、28日と29日には展示エリアに関西大学ブースを出展。スポーツ・環境生理学を専門とする人間健康学部の河端隆志教授と学生らが体験イベント「ランニングフォームクリニック」を開催し、人間の構造的特徴に基づいた理想的な走行フォームなどについて、解説・指導を行った。



■ 関大ニュース

体育会野球部が関西学生野球連盟秋季リーグ戦で4季ぶり35回目の優勝



写真提供：関大スポーツ編集部

関西学生野球連盟秋季リーグで35回目の優勝を果たした体育会野球部

10月24日に開催された平成28年度関西学生野球連盟秋季リーグ戦で、体育会野球部が見事、4季ぶり35回目の優勝を果たした。続く31日、大阪府南港野球場で行われた第47回明治神宮野球大会の関西地区代表決定戦に挑み、7対5で奈良学園大学に勝利し、明治神宮大会出場を決めた。

11月13日に開催された第47回明治神宮大会では、明治大学と対戦したが、1対4で惜しくも敗退した。集まった観客からは、全力で戦った選手達に健闘をたたえる大きな拍手が送られた。

体育会拳法部の高丸裕里さんが全日本学生拳法個人選手権大会で連覇



写真提供：関大スポーツ編集部

全日本学生拳法個人選手権大会で2連覇を果たした高丸裕里さん

10月23日、愛知県・天白スポーツセンターで開催された第32回全日本学生拳法個人選手権大会女子の部において、体育会拳法部の高丸裕里さん(経4)が優勝し、同大会2連覇を果たした。高丸さんは9月に開催された第29回全日本拳法女子個人選手権大会でも優勝しており、今後の更なる活躍に期待が寄せられる。

全日本学生ライフル射撃選手権大会の個人で体育会射撃部の八川綾佑さん、種目別団体で女子が優勝

▲10mエア・ライフル立射60発競技優勝の八川綾佑さん
写真提供：関大スポーツ編集部

10月20日から23日に埼玉県・長瀨総合射撃場で行われた全日本学生ライフル射撃選手権大会(男子第63回/女子第29回)において、体育会射撃部の八川綾佑さん(文2)がライフル射撃競技成年男子10mエア・ライフル立射60発競技で優勝した。また、種目別団体では、女子10m立射40発競技で関西大学が優勝した。



写真提供：関大スポーツ編集部

女子10m立射40発競技メンバー(左から堅田みちるさん、阿部美咲さん、渡辺千晶さん)

体育会弓道部女子が全日本学生弓道女子王座決定戦で準優勝



写真提供：関大スポーツ編集部

10月9日、平成28年度関西学生弓道リーグ戦で体育会弓道部女子がリーグ戦全勝という圧倒的な強さで、7年ぶりの優勝を決めた。また、11月21日に三重県・伊勢神宮弓道場で開催された第40回全日本学生弓道女子王座決定戦は、順調に決勝戦まで勝ち進み、2立目終了時点で同中の大接戦。惜しくも2本差で敗れ、日本一には一歩届かなかったが、準優勝を飾った。

リクルート「進学ブランド力調査2016」で関西エリアの『志願したい大学』第1位に

リクルート進学総研が実施した「進学ブランド力調査2016」高校生に聞いた大学ブランドランキングにおいて、関西大学が関西エリアの「志願したい大学ランキング」で第1位になった。この調査は、関東・東海・関西エリアの高校に通う2017年3月卒業予定者7万4,000人を対象に実施されたもの。関西エリアの調査対象大学254校のなかで、本学は9年連続して「志願したい大学」第1位を獲得。そのブランド力の高さが示される結果となった。